

Title	蜷川幸雄の演出理念とその変遷 : シェイクスピア上演を中心に
Author(s)	菊池, あずさ
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/58541
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	菊池あずさ
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第24156号
学位授与年月日	平成22年9月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	蜷川幸雄の演出理念とその変遷—シェイクスピア上演を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 永田 靖 (副査) 教授 市川 明 教授 上倉 庸敬

論文内容の要旨

本論文は、現代日本の演出家蜷川幸雄が1970年代から近年まで演出しているシェイクスピア作品について、その演出理念の特質と変遷の過程を丹念に論じたものである。A4判138頁からなり、研究方法と問題設定、蜷川幸雄の演出史の簡単な概略からなる「序」、中心となる「演出の変遷」、「演出の特徴」、「演出家と観客」、そして「結」から構成されている。

申請者は「序」において、従来のテキスト分析を中心としたシェイクスピア研究ではない上演の研究を目的とし、そのために繰り返し稽古場を訪れて現場のリサーチを取り入れた研究を行ったことを述べている。とりわけ蜷川幸雄の作品は国内のみならず海外でも数多く上演されており、日本側の評価と海外での評価の比較検討は必須であると説く。本論文では、蜷川の演出歴を時系列的に追うのではなく、主要な作品を中心にそこに顕著に見出せる蜷川の演出理念を、上演を分析することで抽出している。第1部たる「演出の変遷」では、2章を設けて『ロミオとジュリエット』と『ハムレット』が取り上げられ、それぞれの簡明な蜷川の演出史を概観した後に、1974年の祝祭的だった『ロミオとジュリエット』演出と2004年の「静かな」同作品の演出との変化の意味合いを検討している。ここではジュリエット演出の細部や冒頭と終幕部分の演出を比較することによって詳細に検討し、蜷川はここでテキストをより深く読み込んだ手法としての「静寂さ」を見出したとしている。また2003年の『ハムレット』演出では従来は見いだせなかった「死」の問題が深く描かれていることを指摘し、同時にテーマとしての「老い」も作品に描かれるようになったと分析している。

第2部たる「演出の特徴」では4章を設けて、『リア王』『お気に召すまま』『ペリクリーズ』の演出を検討し、『リア王』のフールが従来のフール像とは決定的に異なり、リアとの性愛を背景にしていることを明らかにした上で、新しい解釈を生み出していることを述べている。また「嵐の場」の演出の詳細な比較分析から、『リア王』では蜷川の考える自然との対話が描かれており、

この作品が海外ではそれほど評価されなかった原因を日本と欧州の自然観の違いによるものとしている。『お気に召すまま』において「ハイメン」を日本的な福助として演出し、『ペリクリーズ』においても「ガワー」の演出や伝統芸能の吸収において、蜷川特有の異化効果を発揮させていると述べている。第3部たる「演出家と観客」においては、蜷川の他の作品の演出を検討することで、観客論の立場からのアプローチを試みており、現代演劇研究の焦眉の課題ともいえる、観客とのコミュニケーションについて補足的な論考となっている。

論文審査の結果の要旨

本論文は現代演劇の傑出した演出家である蜷川幸雄の、1970年代から現代までのとりわけシェイクスピア演出を中心に考察したものである。70年代の初期蜷川演出から現代の演出理念の推移について、また演出から抽出できる特質について作品の内容まで遡って検討している。主として、重要なシェイクスピア作品の5演出作品を取り上げて論じられている。一般に上演分析の研究は、しばしば大掴みな理念上の議論になりがちであるが、本論文はシェイクスピア原典にまで立ち返って、そこから演出の細部について検討することを旨としており、従来指摘されていなかった議論を展開できている。第1章の終幕の演出から蜷川の独特な演出手法を抽出した点、第2章のフォーテンプラスの演出の違いから作品全体の解釈の変化を指摘した点、第3章のフールの演出から解釈の主題を指摘した点、第4章の岩石が落下する箇所台詞から自然との対話という観点を見出し得た点は、蜷川幸雄の近年の理念を的確に解説するとともに、上演分析の論文としての意義を十分有していることを示している。

本論文では、従来のシェイクスピア研究が十全に踏まえられている点も上演分析研究として新しい方向性を示し得たと考えられる。上演分析研究はしばしば舞台上の演出の分析に終始し、テキスト分析を丹念には踏まえてないものも少なくない。ここでは従来のシェイクスピア研究を十分踏まえた上で、原典のテキストと場面の演出を突き合わせて上演分析が行われており、新しいシェイクスピア上演研究の方向性を示し得た点も大きな貢献と考えられる。

本論文に関する口頭試問は、2010年8月10日(火)、およそ1時間30分にわたって実施した。そこでは、とりわけ『リア王』の嵐の場の演出解釈とその自然観について演出家の言説を批判的に扱っていない点、蜷川幸雄の演出理念を分析するのにシェイクスピア以外の作品への言及があまり見られない点、時に論理的な展開が乱れている点、引用文献に対する論証と検証が弱い箇所が見いだせる点など問題点も議論を通じて確認することとなった。しかしこれらは本論文全体の大きな方向性や見出した新たな解釈の点などと比較すれば、しばしば技術的で、比較的短時間で解決できる事柄でもあり、本研究が示した基本的な意義を損なうものではない。以上の成果により、本論文を博士(文学)の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。